

労働が「幸せ」の妨げであってはならない

香山 リカ

2012年6月、ブラジルのリオデジャネイロで、世界から3万人の参加者を集めて「Rio + 20 (国連持続可能な開発会議)」が開催された。初日の20日には各国首脳がスピーチを行ったが、その最後に登場したウルグアイのムヒカ大統領のスピーチがネット上で話題になった。

最後と言っても“大トリ”という位置づけではない。主要国の首脳は早々に登壇を終え、実際にムヒカ氏のスピーチが行われたときには、会場にはほとんど聴衆も残っていなかったという。日本のメディアもこのスピーチを報じることはなかったが、日系ユースネットワーク会長の打村明氏が全文翻訳し、自身のブログで公開したのだ。その一部、労働に関係した部分をここで紹介したい(打村氏は転載自由としている)。

私の同志である労働者たちは、8時間労働を成立させるために戦いました。そして今では、6時間労働を獲得した人もいます。しかしながら、6時間労働になった人たちは別の仕事もしており、結局は以前よりも長時間働いています。なぜか？ バイク、車、などのリボ払いやローンを支払わないといけなのです。毎月2倍働き、ローンを払って行ったら、いつの間にか私のような老人になっているのです。私と同じく、幸福な人生が目の前を一瞬で過ぎてしまいます。

ウルグアイは経済水準こそ高くないが、自然と資源に恵まれた国だ。その中で労働者たちはより人間らしい働き方を求め、それを勝ち取ってきた。それにもかかわらず、いまは自ら、本業の後にさらに別の仕事をするなどして長時間労働に戻っている。その根っこにあるのは、より高価なものを求め、使い捨て生活を送ろうとする「ハイパー消費型のライフスタイル」だとムヒカ氏は言っている。環境問題を考えるこういう会議はけっこうだが、その前にまずしなければならないのは、政治的な市場のコントロールとライフスタ

イルの見直しだ、というのが彼の主張なのだ。

「もっともっと」という欲望に取り憑かれたライフスタイルは、環境に悪影響を与えるだけではない。先の「本業の後にまた副業」といった働き方を続けるうちに、結果的にからだの調子を壊し、メンタル不調に陥る人も少なくないだろう。「もっともっと」は、地球だけではなく、そこで生きる労働者自身の心身も破壊するのである。

日本の場合、さすがにバイクや車がほしくて長時間労働を求める人は少ないかもしれない。しかし、成果主義、グローバル化、IT化といったまた別の事情が、働く人たちをより厳しい状況に追い込んでいく。たとえ労働時間はそれほど長くなくても、「気を抜けない」というプレッシャーは以前の比ではない。また、貴重な休日や夜間にも、メール、SNSが追いかけてきて、本当の意味でくつろぐことを許さない。

その昔、うつ病になりやすいのは、「勤勉、几帳面、完全主義」の“まじめ人間”だと言われてきた。もちろん今でもそういったタイプの労働者がうつ病予備軍であることは変わらないのだが、それ以外にも「このままこの会社でやっていけるのか」と不安や不全感を抱える20代、30代の若手、また仕事と結婚や育児との両立に苦しむ女性のうつ病者が激増している。

先のムヒカ氏は、「幸せとは、愛情や人間関係、子どもを育てること、友達を持つこと、そして必要最低限のものを持つこと」だとシンプルに定義する。私たちとしてはここに「自分らしく働くこと」を加えたいが、その労働が幸せを阻害する要因になることは避けなければならない。

幸福の妨げにならない労働とは、何だろう。経営者、労働者、彼らの家族、みながこの問いに真剣に向き合う時なのではないだろうか。